

能力そのものよりも、むしろ知覚、注意、動機づけさらに身体的状態にあらわれるという。なお動作の学習は、作業速度という点から、また過去の習慣という点から、順調にその効果のあらわれることをみとめることが困難であり、従って最近の産業界におけるオートメ化に対して、その適応や訓練はむづかしい。

第8章 思考と知能 (Thinking and Intelligence) ——知能検査の結果によれば、語彙、言語理解、計算などにおいては、若年者に比してすぐれているといわれるが、課題解決というような比較的抽象的な思考においては、高年者は奇想天外というような洞察によるよりも、過去の習慣的な貯蔵反応にうったえることが多いから、考え方に「硬さ」(rigid)があらわれることが多い。

第9章 就業、生産性および業績 (Employment, Productivity and Achievement) ——寿命革命とともに、人間の生産期間が延長することは必至で、退職年齢や退職後の生活についても考えなおす必要があるという問題、さらに技術革新の現時点ではさらに再教育、再訓練が是非とも必要であるというような問題があたりしく発生しつつある。とにかく生産高において、中高年層は若年層に比して劣るのはやむをえないが、質的方面ではまさるといことが実証せられている。なお専門的業績の年齢の推移については、Lehmanの 'Age and Achievement' から多くの事例を引いている。

第10章 パーソナリティの老化 (Personality and Aging) ——カリフォルニア大学の産業関係研究所 (Reichardら) およびシカゴ大学を中心とした研究グループ (Havighurst, Newgartenら) の成果を引用してパーソナリティの老化は、退職による生活環境からの離脱による ego-energy の減退、そしてこれによる自己閉鎖、内膏、固定によって、生活興味や生活態度が変化するという点にもとづくものであろうと結論する。

第11章 老化、適応異常及び精神病 (Aging, Maladjustment and Psychopathology) 老人犯罪の特殊性として使いこみ、文書偽造、自殺などをあげ、これらは、生活行動の動機づけならびにコントロールの変化動揺に基因することを指摘している。さらに老人性痴呆に関して、脳髄の血液循環の低下減退を強調している。

第12章 回顧、諦観そして生命の終焉 (Life Review, Reconciliation and Termination) ——かつて Hall がその著 Senescence (老年期) をかいたとき、その最後の章を The Psychology of Death (死の心理) として、その大著を完結したのと同じように、本章をかいたように思われるが、はたして Hall のその著書を紹介しかつ随所に引用している。Hall が自分

の研究や見解を老年と死のうえにまとめようとしたのと同巧異曲であろう。

以上各章にわたって簡単に紹介したのであるが、実のところ、著者のいう教科書としては、アメリカにおいてさえや行文が難解なのではないかと思われる。もうすこしスラスラとかけなかつたらどうかという感が深い。尤もこれは日本の読者からの注文であるかも知れない。しかし行文のいたるところに、著者の篤実な学究的性格がうかがわれて感服のほかはない。

紹介者のわたくしは、すでに著者の研究室——ベセズダの国立衛生研究所内精神衛生研究所にある——を訪れたこともあり、また私宅も訪問し、さらに国際学会でも再三会っている。氏は寡黙真摯なイギリス風紳士であり、学究者である。序言にかかれているように、若輩の同僚に本書に対する助言や訂正をもとめているところからも、氏の風貌性格を髣髴させることができ、ほんとうになつかしいしかもうらやましい気がする。

(1965. 9. 7)

飯田正一

「歌集レンバン島」

田中重太郎

別項消息欄にしろされたやうに、本学国文科では、最近二十二鉄玄教授をうしなつた。教授は、歌人丹草二として、つとに水壘派で活躍せられ、本学卒業生、在学生にながく短歌の指導をせられ、歌人として、教育者として、大きな功績をあげられた方である。

最近いただいた数冊の歌集のうち、本学ならびに二十二教授にゆかりのある飯田正一講師の「歌集レンバン島」を特に選んで、ここに紹介し、二十二教授を悼むところの一端を表したいと思ふ。学術誌であるこの研究論集に歌集の紹介をすることの非常識はよくわかつてゐるが、このたびは、歌人丹草二先生を偲ぶことのためとして、また国文科在学生の歌心を養ふしをりとして、この非礼をゆるしていただきたい。

本書は追憶の気持の強い歌集であつて、戦時色や国粹色があり、いまの若い女性にはやや理解し難い点もあらうが、これも二十二先生へのたむけの文としてゆるされたく、ときの流れと人間性を考へるたふとい資料として、その作品を味はつてほしい。その作品には、不易の人間性が感じられるはずである。

飯田正一氏は、昭和9年以來関西大学教授であられるとともに、本学国文科の講師として昭和25年4月短

期大学創設以前——女専国文科のときからずっと近世文学を担当していただき、本学に深い関係のある先生である。

歌集レンバン島は、槻の木叢書第22編である。それは、飯田先生が早稲田大学文学部関係者（昭和2年卒業）であることを教へてくれよう。いふまでもなく、「槻の木」は窪田空穂氏の主宰せられる歌誌である。

この歌集をわたくしは、昭和40年9月6日、大阪市東区餌差町の円珠庵における大阪国文談話会総会の席上で著者から賜はったが、帰りの車中で一気に読み終へ、その真実の声にうたれた。感激のあまりゆるる京阪電車特急の車中で、その感激の一端をいただいた本の末尾の余白に綴ってある。

歌集レンバン島成立上梓のいきさつは、著者みづからのあとがきに示るされてゐる。すこし引いてみよう。

この歌集は、私が終戦後、シンガポールのずっと南にあるレンバン島で、抑留生活を送っていたころの歌が主となっている。（中略）全部未発表のものである。

終戦からもう20年経つ。それほど古い歌である。が、当時のことは遠い日のようでもあり、ほんの昨日のようにも思える。（中略）集中の歌を詠みかえしていると、当時のことがまざまざと思ひ出されて、胸を締めつけられるような感慨を覚える。個人の感懐だといつてしまえばそれまでだが、当時の生活が、いまも私自身のなかに大きく影響していることも否定できない。その意味では、これらの歌はあるいは歌でなく素材そのものといった方がいいかも知れないが、私自身のなかに現在も生きていたのである。

著者は、昭和16年応召、横須賀重砲兵聯隊補充隊へ、古い幹部候補生出身者として入隊せられ、昭和18年11月11日門司出港、同12月1日昭南（シンガポール）に入港、第18独立守備隊司令部附となられたが、20年3月中隊長に転出し、陸軍大尉として終戦を迎えられた。

昭南撤退のとき、身辺はすべて整理し、持っていた書物なども全部焼却してしまったが、センブロン（ジョホール州）までは、まだ図嚢の中に岩波文庫の「万葉集」と、富山房百科文庫の「建礼門院右京大夫集」が入っていた。小さくて手軽だからでもあった。それも、検閲を受ける前に焼いた。文字のあるものはすべて携行してはならぬと命令ので、一切合財焼いてしまったのである。それまでの歌稿類も同じく火中に投じた。

終戦後は、食うや食わずのひどい状態だったが、レンバン島に上陸してからは、一層みじめな

生活が始まった。私たちは、それぞれ餓死寸前というところまで追いやられたのである。誰れもかれもすっかり衰弱しきってしまった。そんななかで、ただ一冊の小さな手帳に書きつけておいたのが、本集の歌である。支給された塵紙に書いたりしたものもあったが、それは大部分散逸した。

肉体が衰えれば精神も衰えよう。この歌に自信はない。編集の都合で、手帳の中から百数十首省いたが、それでもやっとこの程度である。恥かしい。

この歌集の出来た由来は、右のような次第である。あとは、各自が先生のお歌を読めばよいのであるが、すべての人が買ふわけにもいきまいし、読める環境を与へられるともかぎるまい。わたくしは、わたくしなりにここに30数首を抄して紹介にかへたい。ただ、この歌集には敘事詩的な面があり、一首一首を独立させての鑑賞に、多少むりなものもあることをおこわりし、できれば、連作的なものは原本によってその前後を味読していただきたいと思ふ。国民として、軍人として、そして、学者として、歌人として、父として、夫として、子としての著者のお心のよくうかがへる歌を選んでみよう。

現地で、「内地への郵便を許されて」との詞書による次の二首がある。

許されただ一通の郵便は生死知らざる妻に認む
ちちのみの父はあれども許されし便りは妻子にた
めらはず書く
（現地自活）

わたくしは、この歌集所収の数百首の歌を読んで、特にこの二首に飯田先生のあたたかい愛の讃歌を思った。いま、あなたはだれともあへない環境におかれてゐる。そして、ただ一枚のハガキが手渡され、もし、だれか1人だけにこれを出すことをゆるされたとしたら、あなたは、それをだれに出しますか。もちろん、その人の環境にもよるが。

飯田先生の厳父と令閨とは別に任んでをられたらしいが、いまならともかく、戦時中において、親よりも妻に「ためはず」「便り」を書かれたそのお心を尊敬するのである。もっとも、これはすでに結婚をした人でないとその心境を解し得ないであらうが。

郵便を許されしかば巻煙草の包装紙もて葉書を作る
包装紙延べてつくれるこの葉書妻子が手にせむその日を思ふ
生きてあるただそのことを認めて苦しき日々の上には触れず
帰還せむ日は知らねども生きてわれ帰るべき日を

妻よ子よ待て

(現地自活)

これらは、前に掲げた二首につづいての作品である。

壮士時(をさかり)の子の四人をば戦ひに征かして
より老いましむ父
老い給ふ父のかたへに遠く征でし子の一人だには
や帰らしめ
東京にとどまりたらむわが父の生死聞き得む日は
いつならむ
生死さへ知らぬ妻子も健かにありとしせねば思ふ
に堪へず
昨夜(きそ)の夜の夢に見えたる妻子らの微笑む顔
を心に恃む
(野草)

海藻を拾ふと磯に立つ兵の夕日に照れる裸形衰ふ
独りあらば狂ひ死ぬべきひもじさと思へど堪ふる
共に堪へつつ
雑炊にまじれる粒の一粒も丹念に食ふ噛みわけな
がら
再びを遭ひがたき世に生きてわれ飢えて死なむか
南の島に
(野草)

戦ひに征でて来しより明けくれはわが学問に遠き
日なりき
一冊の書さへ読まずて久しきを衰へにけむわが読
書力
生得の愚かさ嘆け生涯をかけむわが道ひそかに思
ふ
還らむ日いつとは知らぬ学問に寄する思ひの湧き
立ちゆらぐ
(わが道)

家ぬちに父のをらねば童らもおとなしくむ童さ
びして
雛一つ祝はざりしを時に悔い見ずて久しき吾子を
しぞ思ふ
男の童病みたる後はよく拗ねて泣きつづけるしう
しろ姿よ
ただ一目見しのみなりし末の子は臍氣にだに顔も
浮かばぬ
四人の子一人死なして戦ひに征で来て思ふ殊にそ
の子を
(子らを)
暁の夢に見えしは玉の緒の絶えなむとして苦し
ます母
死に給ふ母とは思へ傍らに侍る日われに多からざ
りき

(母の命 昭和18年4月4日母病死。われ応召して横須賀重砲兵聯隊補充隊に勤務中なりき。その前後を)

秀歌は多い。しかし紹介すべき紙数がない。復員の期待とよるこびとの歌百三首の中から数首抄して、この紹介を終へよう。くりかへしていふ、この歌集は、飯田先生の、人として、学者として、歌人としての、こよなくたふとい人間の記録であると。心から必読をおすすめする。

ほの暗き改札口に手を振るは妻にあらずやまさしく妻なり

暁の駅に下り立ちたまきはる命生きたる妻と相見つ

生死すら知らざりし日も妻子らに会へむをわれは疑はざりし

幼らの眠れるすがた蚊帳越しに見てはおどろく背丈の伸びを

妻が灯すみあかししろく揺れ立てり暁ちかき風の流るる

朝覚めてわれを見出でし幼らの笑みては見するそのはにかみを

諸手つきて朝の挨拶する吾子に涙にじみてうなづきかはす

(6月29日字品に上陸、復員。家族の所在明らかかなど、一路妻の郷里に向ふ)

焼跡の畑に立つは父なりき見ても疑ふその老いまずに

(父は、第一家とともに東京にありき)

(謄写タイプ刷B 6版 248頁 発行所 大阪府吹田市千里山484 関西空穂会 昭和40年8月15日刊 定価600円)

Arthur Hedley; Selected Correspondence of Fryderyk Chopin と邦訳について

佐藤允彦

未だに毎年2、3冊は、ショパンの新しい本が出る程ショパン・ラッシュが続いている。これまでショパンの伝記・研究書といえば、Frederick Niecks; Frederic Chopin as a Man and Musician や Edouard Ganche; Frederic Chopin: sa vie et ses oeuvresの有名な二著を想い出す人もあるかも知れないが、ショパン研究についてはもはや完全に二十世紀で、伝説や寓話の類は、その立場を失くしてしまい、ガンシュ、ニークスの二著は、さしずめ古典といったところである。ショパンの書簡集では M.Karasowski; Life and Letters of Chopin と Henryk Opieński; Collected